

*** 紹介 ***

福田 安典 編著

『伝承文学資料集成第二輯 医説』

かなり旧聞に属するが、標題の書が平成十四年八月に出版された。当書は中国と日本の医学史研究に資するものであり、五年前の出版物ではあるがここに紹介したい。

『医説』十巻は中国南宋の張杲（季明）が編纂したユニークな医書で、医家伝や医書・医薬に関連する興味深い逸話等を含み、内容別に典故も明示して引用している。現伝書には一一八九年の羅頌（羅頌とも）序があり、本書は未完成ながら張杲が序を求めてきたと記すので、原本の成立はこのころ。また一二二八年の諸葛興跋では本書の校正・刊行をいうので、この直後に出版されたと思われる。

南宋版は不完全ながら三点が現存し、南京図書館本は欠葉部分を後述の明・顧定芳仿宋版で補配、北京大学本は当南宋版本による元印で欠葉部分を抄配、日本の宮内庁書陵部本（多紀氏聿修堂旧蔵）は巻九・十のみである。いずれも同一版本で、一二二八年の版本とされる。明代には一五四三年序の鄧初正校刊本、一五四四年顧定芳序の仿宋刊本、一五四六年序の潘瀋刊本、一六〇九年の張堯直重刊本などがあり、清代にも復刻が重ねられた。朝鮮では潘瀋本に基づく一五六〇

年の活字本がある。本書は明代で反響が大きかったようで、兪弁の『続医説』（一五二二自序）や周恭の『医説統編』（一五六九序刊）があり、『続医説』は朝鮮でも恐らく一五六〇年ころに活字で復刻された。

日本では『本草色葉抄』（二二八四成）を編纂した惟宗具俊の『医談抄』に『医説』が多数引用される（美濃部重克ほか編著『伝承文学資料集成第二輯 医談抄』、三弥井書店、平成十八年）ので、一二二八年の南宋版が伝わった影響といえる。標題の当書が『伝承文学資料集成第二輯』として刊行されたのは、『第二輯 医談抄』の刊行と関連しているのだろう。なお江戸時代では、一六五九年に『医説』と『続医説』が合刻され、『続医説』は一七六三年にも再印されている。

さて当書は京大富士川文庫所蔵の一六五九年和刻本を底本とし、その書き入れを含めて福田安典氏が克明に翻字している。当書に後付の福田氏解題によると、あえて和刻本を底本としたのは小島尚質（学古・宝素。一七九七〜一八四八）らによる校合の書き入れがあるためという。無論それで大きな問題はないが、どうも底本とした和刻本は小島尚質の手沢本や旧蔵本と考えられない。

というのも底本は卷一末尾に「天保壬辰（一八三三）壬丑、与井上延明・小島学古・伴子安、据瀋・朝二本校了。信恵記」、卷十末尾に「天保癸巳（一八三三）仲春廿五日、据瀋・朝二本、与小島学古・井上」の書き入れがあるからである。小島学古や井上延明らと校合したと書き入れる「信恵」なる人物

は分からない。一方、底本末尾には「玄盅子句」の書き込みがある、と解題に記される。玄盅は奈須恒徳（一七七四—一八四一）のことで、その子は信恵（徳）という。すると信「恵」なる人物は文字の似る奈須信「恵」だろう。また底本の目録末尾には「朝鮮本 家大人曾据此本墨校、記以韓字。今復朱筆再校」とあるので、底本に墨校した「家大人」は奈須恒徳、さらに朱筆で再校したのは奈須信恵と推定される。すなわち当書の底本とされた富士川文庫本の書き入れは、奈須恒徳・信恵の父子によるものらしい。当書は底本の蔵印記まで翻字していないので不詳だが、もし奈須恒徳の「久昌院蔵書」があれば奈須恒徳・信恵の旧蔵に相違ない。

奈須恒徳は『本朝医談』（一八二二刊）を著し、続編の『本朝医談二篇』（一八三〇刊）には小島尚質が跋を記しており、恒徳と尚質には親交があった。恒徳・信恵が小島尚質や井上延明らと一緒に医書校合を当時よく行っていたことは、後述の台北・故宮博物院所蔵本にある尚質の書き入れ等より分かる。ともあれ底本が恒徳・信恵の書き入れ本であろうと、その校合に小島尚質が参与していたのは間違いない事実である。

尚質の学問は森鷗外の『小島宝素』伝で片鱗をうかがえるが、善本漢籍解題書の『経籍訪古志』にある海保元備や洪江抽斎・森立之の序が言及するように、書誌鑑定と校勘の学に秀でていた。のみならず、医業書では多紀家につぐ大蔵書家でもあったらしい。幕府医官を任じた小島尚質・尚真・尚綱

の父子三代が収蔵した古典籍の大多数は、尚綱の没年に来日した清国大使館づきの楊守敬が購入し、守敬旧蔵書の主要部分は台北の故宮に所蔵される。評者は台北故宮の小島家旧蔵古医籍の全調査を完了し、その精緻な校勘と鑑識眼に深い感銘をうけた。

たとえば台北故宮には尚質手沢本の『医説』がある。これは顧定芳仿宋本を模写した上で、鄧初正本から顧遂と羅頊の序を転録し、「此の二序、小字嘉靖本の載せる所也。今ま此の本の首に冠するは嘉靖二本の源流、自から異なるを別つ所以也。坊刻の羅序は文字に異有り、而して此れ則ち祖本たる耳」と書き入れている。つまり彼が小字嘉靖本と称する鄧初正本は顧定芳本と別系統で、坊（和）刻本は顧定芳本の系統と判断していた。内閣文庫には天保十五（一八四四）年の尚質手跋本『医説』写本があり、底本は顧遂校訂の鄧初正本なので、やはり台北故宮の顧定芳本の模写と近い時期に筆写されたのだろう。こうした版本の系統を判断する根拠となった校勘作業の経緯が、今回翻字された和刻本にある書き入れから分かるのである。

尚質は倭宋学人と自称したように宋版の重要性を認め、その旧姿を校勘で復原することに精力を傾けていた。『医説』は多紀氏の聿修堂に宋版があるものの、巻一〜八が欠落していた。また明の翻刻版にも版式や文字で優劣が混在していた。『経籍訪古志』と小島尚真の『医籍著録』によると、顧本は版式・字体が仿宋ではあるが、文字に問題がある。張堯直本

は顧本に基づき、版式を改めているものの文字は顧本より宋版の旧を保存している。和刻版はこの張本に基づく。鄧初正本は版式に宋の旧はないが、文字は顧本より優れている。潘藩本は諸版と別系統の文字で何に基づくか不詳だが、宋の避諱らしき文字と諸葛興の校正らしい増補が項目にあり、朝鮮本はこの潘藩本にすべて基づく。以上からすると、理想論は宋版系の顧本を底本とし、その文字を別系の潘藩本で第一に校勘し、第二に同系の張本と鄧本で校勘すると、宋版の旧姿が浮かび上がるかもしれない。富士川文庫の和刻本にある書き入れは、この第一段階の作業に該当するといえよう。

ところで彼らは一八三二年冬から一八三三年春にかけての校勘で、校異を書き込む底本に和刻本を使用した。それは宋版↓顧本↓張本↓和刻本という復刻関係につき、宋版系の和刻本を選択したのではない。そうした復刻関係が分かったのは後のことである。和刻本の底本となった張本は京都の高階家の所蔵で、その存在が江戸医学館の学者らに知られたのは、尚質らが天保十三(一八四二)年秋に上洛して行った蔵書調査によってだった(『河清寓記』)。また尚質が鄧本を書いたのは一八四四年、顧本も同時期の模写らしいので、一八三三年冬段階では「潘・朝二本」で校勘した結果を書き込むのに和刻本を使用するしかなかったといえる。

小島旧蔵書にある書き入れから想像するに、小島父子や友人が回り持ちで主催した同読や校読という校勘の会は、ふつう以下のような形式だったらしい。参加者は各々ある版本を

担当する。そして誰かが主底本の原文を頭から音読し、これと違う文字が別本にあると担当者が指摘、それを「○字 某本作△字」のように主底本に書き入れる。それゆえ入手が比較的容易で、書き入れしても問題のない和刻本を主底本とし、潘藩本で校勘したらしい。さらに潘藩本と版式まで一致する朝鮮本も併用したのは、両本が必ずしも親子関係ではなく、ある祖本から個々に派生した兄弟関係である可能性も疑っていたためかもしれない。この校勘を行った結果、朝鮮本は潘藩本にすべて基づく親子関係という『医籍著録』と『訪古志』の判断が生まれたと思われる。

ただし底本の和刻本に対し、そのルーツたる顧本、さらに顧本より文字が優れるとされる張本や鄧本で第二段階の校勘を彼らがしたかどうか。それを伝える史料等の存在は管見の範囲にない。しかし現在では、顧本が台北・新文豊出版公司から一九八一年に影印出版された。また顧本で補配した宋版の一九三三年影印本が和刻『続医説』とともに、一九八四年に上海科学技术出版社から再影印出版された。したがって両影印本と当書を校異するならば、宋版の旧姿を相当正確に求めることが可能だろう。以上は当書の解題「一、諸本と底本」にいささか問題を感じたので、紹介者の卑見も交えて贅言を述べた。

当書の解題「『医説』の享受と展開」では日本に及ぼした本書の影響を、浅井了意の『伽婢子』における説話形成や、平賀源内の浄瑠璃作品『神靈矢口渡』などを挙例して述べる。

このように鎌倉時代から江戸時代にかけて『医説』が受容され、医学・文学や関連領域にまで及ぼした影響は相当に大きい。また江戸後期になると小島尚質や奈須恒徳らにより、本書の詳細な校勘研究も行われていた。それらは従来の医史学研究で等閑視されていた分野および視点といつていい。

当書はそうした様子を伝えるために、奈須恒徳らによる書き入れを含め、和刻本の訓点や送り仮名までを克明に翻字している。その労は賞賛に値する。当書の刊行によりユニークな中国医史に富み、また日本医史にも関連する本書が、今後は容易に研究利用できるようになった。当書が日本の伝承文学資料集成の一環として出版されたためか、およそ斯界では知られていなかった。それゆえ五年前の出版に対して遅きに失した誹りを免れ得ないが、当書の価値からあえて紹介に取り上げた次第である。

(真柳 誠)

〔三弥井書店、東京都港区三田三二―二―三九、A五判、総三九〇頁、二〇〇二年八月二十三日第一刷発行、定価九〇〇〇円(税別)〕

中村 禎里 著

『中国における妊娠・胎発生論の歴史』

本書は中国の妊娠・胎発生論の歴史について述べたもので

ある。構成は「第一章 戦国時代秦漢代」「第二章 六朝隋唐代」「第三章 五代宋金元代」「第四章 明清代」「終章」付論としてインドの仏教経典における受胎・胎児発育論について述べており、「第一章 受胎と識・中有」「第二章 胎児の発生」となっている。

本書を開くとまず、妊娠について扱った書の多さに驚く。果たして目に見えない胎児の成長をどのようにとらえていたのだろうか。その疑問に最初に答えてくれるのが、第一章の「戦国時代秦漢代」である。本章は当時の気の觀念を中心とした生命発生論に言及するとともに、「胎産書」「管子」の胎発生論にも触れている。「胎産書」の胎発生論は、妊娠期間の十ヶ月を各月ごとに記している。記述は詳細で、血・筋・骨といった身体器官がいつできるのかも書かれている。もちろん実際の発育過程とは異なるが、だからこそ当時の人々の思考が読み取れるとも言えよう。第二章からも時代ごとに胎発生説を詳細に分析している。およその胎発生説は『胎産書』から受け継がれていることがわかる。ただし、「胎産書」の記述はそのまま受け継がれていただけではない。各書成立当時の思想、社会の影響を受けながら、発展・変化を遂げていく。六朝隋唐代成立の各書に出現した胎発生論は道教経典の影響を受けているものや、『素問』『靈樞』の影響を受けているものなど様々で、お互いが関連しあう部分もあるという。また隋代成立とされる『五臟論』には、流産・墮胎による胎觀察に基づくと考えられる記述が出現している。第三章で述